

鼎の三脚



萩原雄祐
元東京大学東京天文台台長

荒涼たる砂漠に疲れはてた旅人は、地平線のはるか彼方のオアシスを夢みる。この苦悩に満ちた人生の行路をさまよう人類は、到達しえないものにあこがれる。こゝに人類文化の原動力があり、最高目標がある。そこに天文学の意味があり、天文学が原始時代から人類の深刻な課題として提供されている所以である。

宇宙の始めとか終りとかを知るためには、まず現在の宇宙を知らねばならない。しかもあの広大な宇宙には、常に新しく星は生れ、たえず星は死滅しつゝある。

天体は大きな実験室であり、極端に高い温度、低い温度、極端に稀薄な状態から、密度の極大な状態まである。このような研究は天体のスペクトルを撮ってそれを精密に研究してはじめてわかる。スペクトル線の太い細い、濃い淡い、その先の強さの移り具合からくわしく研究すると、天体の温度、圧力、そこにある電気の間や磁石の場の強さ、その組成、つまり1ccに水素や炭素や鉄の原子が何個あるかがわかる。

これらの天体は光が弱いもので、スペクトルのくわしい研究には、天体からくるたくさんの光を集めるために大きな口径の反射望遠鏡が必要である。

天体の組成、構造、作用を知り、ひいては天体の進化を研究するためには、突然輝き出した新星とか、短時間にスペクトルを変える変光星を研究することも必要である。

ヨーロッパとアメリカと日本とは経度で120°ずつへだたっている。ちょうど茶の湯で使う鼎の三脚をなしている。しかも地球は自転しているから、欧米の昼の時に起った天界の現象は、その時夜である日本でないと観測できない。だからヨーロッパとアメリカと日本と三ヵ所に、同じ大きさの望遠鏡を置いて天界の現象のたえない不断の連続的研究をしなければならない。急激に変わるか、突発的に起る現象をつかまえて、日本がぜひなくてはならない研究を、そしてそれがなくては世界の天文学の進歩が妨げられるというような研究をしなければならないのである。日本のためひいては世界人類のため、日本の天文学のもつこの重大な責務を果したいと存ずる次第である。

昭和28年5月15日・NHKラジオ「やさしい科学」より抄録

萩原雄祐博士（1897 - 1979）

東京大学名誉教授。1946年10月に天文台長に就任、戦後の最も困難な時代に天文台の復興と拡大に尽力する。台長在任中の10年あまりの間に、掩蔽観測による測地事業、報時事業への水晶時計の導入、乗鞍コロナ観測所の設立、太陽電波観測用の口径10mのパラボラアンテナ設置、と次々と日本の天文学の近代化を進め、天文台職員数を4倍に増員した。

1952年ローマで開催された国際天文学連合に戦後最初の日本人として出席、その帰途ヨーロッパ、アメリカの天文台を歴訪し、世界の趨勢は天体物理学の発展にあることを痛感、日本国内に大望遠鏡を建設することを決意する。その後、実現に向けなみなみならぬ努力をする。アメリカ各地の天文台を講義しながら費用を得てまわり、大望遠鏡についての相談をしたり、シャプレーやフォード財団に口径150cm程度の鏡を貰い受けるようにつけあつたこともある。計画を進行している最中、御前講義の機会があつた。天体の進化について進講したのち、天皇陛下に向かつて、“このような研究をするには大望遠鏡が必要である。1億5千万円くらいあればできるのでそれが欲しい”と直訴した*逸話がある。その後、日本学術会議の勧告をとりつけるなどして、台長在任の終わりの頃の実現の運びとなり、岡山天体物理観測所が口径188cm、91cmの望遠鏡とともに設立され、日本でも天体物理学の観測研究ができるようになった。

萩原博士の行政能力が優れていたことは上記からわかるが、それは“行政の技術によってではなく、天文学に対する情熱と日本の天文学の水準を世界の一流にまで持ち上げようとする意欲に支えられたものである”、と古在由秀博士（後の東京天文台および国立天文台台長）は記している。

* コラム「萩原雄祐博士の直訴事件」参照

萩原雄祐博士の直訴事件

1953年の正月である。「たまたま新年の講書始めの進講者の一人に私（萩原雄祐博士）が選ばれた。その日は早朝に目がさめた。進講の原稿に望遠鏡のことを書き足した時の私の心境は実に澄みきっていた。昔ならば直訴ははりつけの刑をうける！佐倉宗五郎を思いうかべて、次の時代のために生命を賭ける喜びに震えていた。天体の進化について進講申しあげた後で、こんな研究をするには大望遠鏡が必要である。1億5千万位あればできるのでそれが欲しいと申し上げた。聴講の人たちの間にはざわめきが起っていた。しかし私は総理大臣の吉田(茂)さんが欠席されていたのは返えず返えずも残念であった。吉良を打ち損じた浅野の心境であった。聴講の学者たちは文部大臣の大達さんに、あんなに云っているのだから買ってやれと云ってくれたらしい。別室で御馳走になっていた我々進講者のところへ宮内府長官がきて話してくれた。しかし私は内心穏かではない。直訴は死刑である。私はその足で大学へ行って矢内原総長に私はこうこの悪いことをしたから応分の御処分をといった。矢内原さんは笑って答えない。それから文部省に行つて福田局長にも、こうこのことをしたから大学総長にいつて私を処分させてくれと話したが、これも笑って答えない。進講をきいていた岡野さんは先生よかったですよと云う。その後は何の音沙汰もなく、次の時代のために生命を投げ出した甲斐があつてここに74吋の望遠鏡ができあがつたのである。」

これは、天文月報第54巻（1961年）に書かれた「直訴事件」の真相である。